

思いやりの一言

利府町立利府中学校 三年 佐藤 美紀子

今年の三月十一日に東日本大震災が発生しました。世界最大級のマグニチュード9クラスの大地震です。日本は未曾有の大災害にありました。

震災当日は私の住むところでも大きな揺れを感じました。海から遠かったので津波にはありませんでしたが、コンクリートの地面は割れているし、電柱は傾いているし、信号は動いてないしで、当時学校で部活中だった私は、半分パニックのまま家へ向かいました。その途中、食料やカイロを買って帰ろうと思いつきコンビニに寄りました。店内には物が散乱し薄暗く、すでに短い列ができていました。私も商品を持って並ぼうとしましたが、丁度同じタイミングで並ぼうとしていた女の人がいきました。私は一歩引き下がりましたが、女の人は「どうぞ。」と言って譲ってくれたのです。そして、会計をすませて商品の入った袋を受け取るとき、レジ打ちの店員さんが、「大丈夫？ 気をつけてね。」と言ってくれました。コンビニの外は雪が降っていましたが、心はとても温まりました。列の順番を譲ってくれた女の人は、こんな状況の中、早く会計をすませるために先に並びたかつたろうと思います。レジ打ちの人も、早く家に帰りたいと思えます。家族に電話したかつたろうと思います。でも、目の前の人達のため黙々とレジを打ち、気づかいの言葉をかけてくれるのです。あのとときの不安な気持ちを消してくれた「どうぞ」「大丈夫？ 気をつけて。」の言葉は、声、表情と、震災から半年経った今でもしっかりと心に残っています。

「どうぞ。」

「大丈夫？」

「気をつけて。」

「ありがとう。」

あの震災から、私の心に残っている言葉は普段日常生活で使われるような何気ない言葉ばかりです。こんな些細な一言がこんなにも心に残るのは、きっとその短い言葉の中にたくさんの思いやりが込められているからだと思います。言葉はちよつとの気持ちの違い、込め方などでうんと印象が変わると思います。

「どうぞ。」

見ただけではそんなに大した言葉ではないように思えますが、あのとときの「どうぞ。」は、たくさんのお思いやりが詰まっていたから、こんなにも心に響いたのだと思います。

「思いやり」。ひらがなだと「おもいやり」。やわらかくて、あたたかく感じます。

給水所などできちんと一列に並び、自分より他人を思いやる日本人の姿は海外でも称賛されています。私はこの震災を通じて、思いやりにあふれた様々な言葉を見て聞いて、「自分が日本人で良かった」と思いました。

これから日本の未来は私達が背負っていかねばなりません。「思いやり」の言葉を心にとめて、今からでも自分達にできることを探していきたいと思えます。